

# 動物学級ホームステイ事業について

動物愛護センター 川村 昭道 大木 正行 小山 淳一  
小野 祥平 藤森 令司 塩野 美代子

## 1 はじめに

学校で動物を飼養することは、情操教育や科学教育の面で一定の効果があると期待され、多くの学校でうさぎやモルモット、ニワトリなどを飼養している。その一方で、休日や長期休暇中の動物の世話をする体制が必ずしも整っておらず、また、飼養や治療などに必要な予算が十分に確保されにくいことなどから、動物飼養の有用性を認識しつつも実際に動物を飼養できない学校もある。

そこで昨年度、動物愛護センター(以下、センター)で飼養しているうさぎ・モルモット、一定期間学校へ貸し出し飼養体験することで、動物の習性・生理を理解すると共に、正しい飼養方法を習得し、さらには命を大切に作る心や問題解決能力を育むことを目的として、「動物学級ホームステイ事業」(以下、ホームステイ)を実施したので、その概要を報告する。

## 2 実施方法

- (1) 対象 A 小学校の1学年、2クラス
- (2) 期間 2005年10月25日から2006年3月15日まで  
センターではショートステイ(1ヶ月)とロングステイ(3ヶ月)のコースを設け、この小学校ではショートステイを選択した。
- (3) 方法
  - 1) 動物は1クラスにうさぎ2匹、別のクラスにモルモット2匹の計4匹とした。
  - 2) うさぎ・モルモットはケージでの教室内飼養とした。  
飼養に必要な道具や器具(飼育ケージ・給水ボトル・食器・かじり木・すのこ・木製巣箱・へら・抱き袋・雑巾・タオル・木製チップ)、飼料(ラビットフード・モルモットフード・乾燥牧草・ドライフルーツ)はセンターで用意し、飼料はなくなる前に学校からの連絡によりセンターの職員が学校へ搬入した。
  - 3) 事前に担任・児童を対象として、うさぎ・モルモットの習性及び生理に関する講習及び世話の方法や扱い方の実演と飼養管理に関する注意点の講習を行った。
  - 4) 適正に飼養管理するためのルール(か・き・く・け・こ)を提示した。  
か かわいがらる・・・大切に育てよう。  
き きれいにする・・・手指の消毒・ケージ・教室内の清潔を心がけよう。  
く くふうする・・・動物が住みやすく、管理がしやすくなるようにしよう。  
け けじめをつける・・・ふれあう、勉強する、休ませる時間をはっきりさせよう。  
こ こきゅう・・・腹式呼吸で気持ちを落ち着けてから触ろう。
  - 5) センター職員が月に1回、動物の健康チェックを行った。
  - 6) 学校が休みとなる土日祝祭日・冬季休暇中は、児童の中から当番を決めて自宅へ連れ帰り飼養した。
  - 7) 事業終了後、保護者および担任にアンケートを実施した。

## 3 結果

### <担任の目標と姿勢>

- ・ 児童たちが親の代わりとなって動物の命を守り、感じることを目標として指導していた。
- ・ 動物を通して身の回りの問題や生活習慣を考えさせ、真剣に命を預かる事に取り組んでいた。

### <児童の初期段階と発展>

- ・ 初期は動物の扱い方が乱雑であった。また、クラス内の環境変化になじめず、授業への集中力も不足していたが、次第に安定した。
- ・ 世話についても当初は段取りが悪く、決められた時間内に終わらせることが出来なかったが、徐々に作業分担し協力する体制が生まれていった。
- ・ 開始後2週間ほどで動物を観察する余裕が生まれ、体格・性格などの違いに気付くようになった。
- ・ ショートステイを児童と担任の希望で、約5ヶ月間のロングステイへと移行した。

### <発生した問題・課題>

- ・ 飼育に対する慣れから、抱き方や扱い方が不適切になった。また、動物が怪我をした。(動物を持ち歩く。動物を持ったまま転倒する。うさぎの爪が欠損する。)

- ・ クラス内の清掃がしっかりできていなかった。(チップ、乾草の飛散)
- ・ ステイ初期、資材不足の情報が学校から連絡されなかった。
- ・ アレルギーの児童に対する配慮の不足。

<評価及びアンケートについて>

- ・ 保護者へのアンケートでは、児童の自主性が向上したり、動物に対して関心が高くなったりしたという意見が寄せられ、保護者の大半がホームステイを実施してよかったと感じていた。(表1)
- ・ 担任は、飼育にかかる金銭面・健康管理面・飼料準備面での不安・負担をクリアできた事で、育てる事や命を考える事に集中して取り組み、当初の目標を達成できたと評価した。

(表1 アンケートの集計結果)

対象者 57名 回答者 46名 回収率 80.7%

ホームステイをして良かった点 (単位 人)

飼育の経験	命の大切さ	自主性の向上	思いやり、優しさ	学校での楽しみ	その他
17	13	10	9	2	3

ホームステイをして感じた問題点 (単位 人)

動物の健康	家庭でのステイ	アレルギー	衛生面	その他
9	7	5	3	3

家庭でのステイの有無 (単位 人)

あり	なし
32	12

家庭でステイをしなかった理由 (単位 人)

家庭の事情	動物飼育中	その他
7	4	2

家庭でステイをして感じた事 (単位 人)

飼育体験ができた	自主性の向上	動物の健康が不安	アレルギー	命の大切さ	その他
11	9	5	2	2	6

ホームステイ後の子供の変化 (単位 人)

動物への関心の向上	自主性の向上	動物に対する優しさ	命の大切さへの理解	小さい子への優しさ	その他
15	12	12	5	2	6

#### 4 考察及びまとめ

児童が愛情を持って、丁寧にそして積極的に動物の世話をする姿は、心と頭と体で命に真剣に向き合っていたことを表すものであった。

教室内で飼養することで児童と動物の物理的距離が近くなり、更に丁寧に育てることや家庭へ持ち帰ることで心理的距離も近くなり、より多くの関心と愛情を注げたと考えられた。

このような事業を行うにあたっては適正な管理方法や知識の提供、安心して相談できる支援体制を整えることが重要であると感じた。

多くの保護者が今回感じたことは子供の成長であった。また「生き物を飼養することが大変な事であるとわかって良かった」とする意見もあり、生き物との関わりについて考え直すきっかけを提供できたと考えられた。

一方、動物を抱いたまま転倒する、爪を折るといった事例は、世話の慣れと共に、扱いが雑になったため起きたと思われる。この事から飼養管理に関する知識の伝達方法について再度検討する必要性を感じた。

また、事前にPTAとの連携が不十分であったこともあり、初めは保護者から家庭での飼養管理について心配する声もあがっていた。事前にセンターと学校、およびPTAの三者が十分な打合せをし、連携できる体制作りをする必要性を感じた。

児童の姿勢から、決して大人から命の大切さを教えられたというのではなく、飼育体験の中から子どもが本来持っている「命を大切に作る心」を引き出したものであると感じた。今回の事業は、命を考える体験、きっかけ作りの一つになったと考えられた。

学級で動物を飼育したいと希望する教員は多いが、日々の業務に忙殺されて、なかなか行動に移すことができない現状がある。センターはこうした観点に基づき、関係機関と協議し改善を行って、本事業のなお一層の充実、展開を図っていきたい。